

地域の底力

兵庫県養父市

先例にとらわれない
官民それぞれの挑戦が
地域を切り拓く
兵庫県養父市

幅広い世代への多彩な支援から、
農業をはじめとする規制改革まで、
兵庫県養父市の画期的な挑戦の数々が、
広く世間の耳目を集めている。
市民もまた、それぞれの立場で、
あらたな試みに挑み、まちは前進を続ける。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝一

6月の夜、数多のホタルが光の筋を描く、兵庫県内有数のホタルの名所として知られる養父市奥米地地区「ほたるの里」。敷地内の宿泊可能な「自然体験学習館『めいじ』」などの施設を利用して、地域の自然に関して通年学ぶことができる。



養父市の特産品の代表格は、江戸時代から受け継がれてきた在来種の「朝倉山椒」(左上)とその加工品。最近ではニンニクも認知度が高まっている。

時代の変化に応じた積極的な支援と改革

兵庫県北部の但馬地域に位置する養父市は、二〇〇四年に養父郡八鹿町、養父町、大屋町、関宮町の四町が合併して誕生した。約二万人が暮らすまちは、県下最高峰の氷ノ山のほか標高一〇〇〇メートル級の山々に囲まれ、森林が八割強を占めるなど、豊かな自然に恵まれている。市の全域が中山間地域に当たり、その営みを支える農業が経済の要だ。

初見では正しく読みづらい市名は、実は「やぶ医者」の語源といわれる。五代将軍・徳川綱吉の御

「市民のみなさんが快適で豊かな生活、幸せな生活を送れるのなら、どんな交渉の場にも立てます」と、市長の広瀬栄氏は語る。

殿医を務めた養父出身の名医・長島の庵にあやかるべく多くの医者が「やぶ」の看板を掲げたため、逆の意味で根づいたと語るのは市長の広瀬栄氏だ。

広瀬氏は民間企業勤務を経て一九七六年に旧八鹿町役場の職員となり、二〇〇八年から現職を務める。就任以来、多くの改革を行い、結婚、出産、医療、教育といった若い世代に向けたサポートも周辺に先駆けて手厚く行ってきた。

「少子化が進む地域にとって子どもは宝ですから、まちの持続のために必要な施策として進めてきただけのことです」

広瀬氏は控えめに語るが、現に移住者が増えている。市の「やぶ暮らし住宅支援制度」を利用し定住につながった実績は、二〇二三年度までの五年間の累計で二五九組、五五一名を数え、移住を案内する情報誌の「住みたい田舎ベストランキング」ではここ数年、近畿エリア一位に選ばれている。

基幹産業である農業においても、助力を惜しまない。農業委員会の同意を得て、農地権利移動許可事務を市が行えるようにしたほ

か、農生産法人(現・農地所有適格法人)の設立要件緩和、企業による農地取得の実現(現在、一二法人が営農中)といった規制改革を進めてきた。こうした規制改革の進展は、二〇一四年の国家戦略特区指定が後押ししたと広瀬氏は話す。

「農業従事者が減り耕作放棄地が増える状況を変えるべく、新規就農者を増やしたいと思っても、現行制度では無理でした。しかし特区の指定を受けたことで手をつけられずにいた提案が受け入れられ、実現することができました」

高齢者に向けては、シルバー人材センター会員の就業時間拡大、タクシー事業者と連携した自家用車利用のライドシェアサービス「やぶくる」など、暮らしの充実に向けた特例が特区指定とともに認められるようになった。コロナ禍前から始まったテレビ電話による服薬指導など、養父市の特例から全国に広まった規制改革は少なくない。

「移動手段の確保を含め、たとえ過疎地であっても豊かに暮らせることが市民の権利ではないでしょ



八鹿地区、妙見山の中腹に立つ「名草神社」は、写真の三重塔のほか本殿、拝殿が国の重要文化財に指定されている。三重塔は江戸期寛文年間に行われた出雲大社大改修の際、銘木として知られる妙見杉を提供した返礼として譲渡された。

うか。制度を理由にできないと言うのは簡単ですが、正すべきは是正し、市民が普通の生活を当たり前にできるようにするのが行政の役目。社会制度は世の中の変化に合わせて変えていくべきだと思っています」

通年雇用の持続を思い異分野に乗り出す企業

先例にとられない挑戦は、市中にも見られる。二〇一五年からニンニク栽培に進出した「ナカバヤシ」の兵庫工場もその一つだ。

大阪市に本社があり、アルバムやノートといった紙製品、事務機器などを扱うナカバヤシは、

近年は発酵食品やきな粉ブームが追い風となり、八鹿浅黄の栽培は追いつかないほど需要が高まっている。きな粉は、豆の風味が驚くほど豊かに立つおいしさだ。



ベストテンに入るまでに。その半数を、ナカバヤシが占める。

「長年、製本技術は社外秘とされ、見学すら一切受け入れてこなかったのですが、ニンニク栽培をきっかけに受け入れを始め、役所や近隣の農家さんなど地元とのつながりが生まれたのが最も大きな変化です」

竹内氏の言葉を、滝野氏が継ぐ。

「市が推進する食育の授業で先生を務め、弊社のニンニクを使った給食を子どもたちと一緒に食べるとい、初めての経験をさせてもらいました」と、小学校の教壇に立った記憶を振り返り笑顔になった。

若い世代に寄り添い 移住、就農をサポート

農業は移住者を引き寄せる力にもなり、とりわけ若い世代の関心が高まっている。そんな現状を語るのは、二〇一七年の設立以来、市と連携しながら移住相談窓口を担う一般社団法人「田舎暮らし倶楽部」代表の西垣憲志氏だ。

「若い方たちは自然農法やオーガニックといった食の安心・安全への思い入れが強く、子どもには自分で作った確かなものを与えたいという方もいらっしゃいます。国家戦略特区で農業改革が行われたことを知り、養父市は農業を始

田舎暮らし倶楽部では、地元で開催される移住説明会にとどまらず、東京や大阪のフェアに出向くことも多い。西垣氏は「右肩上がりの社会で生きてきた僕らが今の若い世代の気持ちをキャッチするには、カウンセリングマインドが大切」と、移住相談に際しての心構えを語る。(写真提供:田舎暮らし倶楽部)

めやすそうだと
思われる方も増えてきました」
田舎暮らし倶楽部への相談を経て、これまで多くの家族が養父市への移住や就農を果たした。一方で農業未経験者からの相談も多い

が、収入や労働時間といった現実
にふれ、夢をあきらめた人も少なくなかったという。

それなら

自分たちが「稼げる農家」のモデルになり、移住・就農の相談者に少しでも希望を与えられるようになるうと、田舎暮らし倶楽部では絶滅寸前だった在来品種の大豆「八鹿浅黄^{やうのあきぎ}」の栽培に着手。大豆の加工技術を一から学び、きな粉や味噌の商品化を実現した。こうした商品は地元の量販店や通信販売でも人気を博しており、「八鹿浅黄」の知名度は大きく向上したという。

「八鹿浅黄そのものの需要も増える中、市内での栽培量の拡大を狙い数年前に在来種研究会を立ち上げました。今では大豆栽培を始める人が増え、中には離農した高齢者が復活したケースもあります」と、西垣氏は話す。

二〇二三年には農業体験を目的と



左/デザイナー、教員、版画家など多彩な経歴を重ね、現在は農業と移住促進に励む田舎暮らし倶楽部の西垣憲志氏。上/農業体験の申し込みは家族連れも多く、地元の小学生が参加すること。(写真提供:田舎暮らし倶楽部)



した「駅近百姓塾」を発足させ、年間を通して農業体験ができる環境を整えらるとともに、農場に隣接する古民家をゲストハウスとして用意し、希望に応じて、長期間の農業体験にも対応できるようにした。

「より多くの方がご家族で養父



上／誕生直後の子豚を取り上げる、八鹿畜産養豚部の島垣緑氏。子どもたちに向けた食育の授業では、繁殖から手がける養豚業の説明とともに、「命をいただくことの大切さ」を語る。

(写真提供：(株)ビーナッツ)

下／事務所を飾る多数の豚グッズは、新たに生まれた緑の広がりをお語る贈り物が中心。



市に移り住み、ここをふるさととする子どもたちが増えていくのがわれわれの願いです。そのために、農業や養父市に夢を求める若い世代の心に、できるだけ寄り添いたい。移住者が増えれば新しい風を吹き込み、地域の人の意識が変わるかもしれません。ゆくゆくはこの活動を次世代につないでいきたいとも考えていますが、思いを託すためにはまず、われわれが地域に愛着をもって暮らすことが肝心だと思っています」

一軒残った養豚農家の起死回生に向けた挑戦

養父市で生まれ育った若い世代にも、チャレンジは見られる。二〇一三年に「おだきさん家の八鹿豚」というブランドを立ち上

げた、八鹿畜産養豚部の島垣緑氏もその一人だ。実家の小田垣家が営む養豚業に両親、弟とともに携わり、約千頭の豚の世話から経理事務、営業まで幅広くこなしている。

養父市にはもともと七戸の養豚農家があったが、後継者不足や飼料の高騰など諸々の事情により廃業が進み、二〇一二年には祖父の代から続く小田垣家一戸だけという危機的状況に陥った。

「廃業寸前まで追い込まれ、なんとか生き延びたいという必死の思いから生まれたのがブランド化でした。給料をぎりぎりまで抑える苦しい時期が続きましたが、豚肉のおいしさや安心・安全を消費者にいかにつたえることができるかを考えるいい機会だったと、今は思えます」

畜舎は、市の中心地から離れた山奥。健やかな山の水を与えられ、自然豊かな環境でストレスなく育つ豚の飼料には、乳酸菌など天然由来の栄養が加えられている。さらには祖父が始めた養豚業が、軒下で飼う残飯養豚だったことにも思いが至ったという。



おだきさん家の八鹿豚はハムやベーコン、ソーセージといった加工品が多種そろい、贈答品としても人気が高い。

「時代や方法は違いますが、エコフイードの先駆けともいえる祖父のスタイルを受け継ぎたいとも考え、差別化を図る意味でも地元菓子店で余ったケーキの切れ端を飼料に混ぜるようになりました」

立ち上げに向けたブランド名の考案やロゴマークの作成は、島垣氏自身が手がけた。これまで接点なかった市役所や商工会にも足を運び、存続への熱い思いを語ったことで、市内はもろん但馬地域内で支援の声が広がり、市のブランド推奨品「やぶの太鼓判」にも認定された。尽力のかいあってうま味、甘味が際立ち、脂身がとろける豚肉のおいしさは認知されていく。知名度の向上とともに、小学校での食育授業を依頼される



機会が増え、子どもたちとふれあう時間も得られるようになった。

現在は事業の拡大や法人化を目指すとともに、豚皮を使った革製品の製造など、恵みを余すことなく活用することも念頭に置いているという。

「いずれは豚のテーマパークを、という夢も持っています。うちの豚の知名度向上が、雇用を含めた地元への貢献になればという思い

養豚場があるのは、緑に包まれた畜産団地内。「うちの豚はいつも熟睡していて、簡単には起きてくれないうです」と、健やかに育つ様子を島垣氏は笑顔で語る。(写真提供：(株)ビーナッツ)



「八鹿豚を但馬牛のようなブランドに」との思いを込め、島垣氏は高校時代に「日本学校農業クラブ全国大会」で家業について語り最優秀賞・農林水産大臣賞に輝いた。自ら筆を執った「八鹿豚」の文字は、その意志の表れのように力強い。



「農業はすべての原点であり、有機農業もアートだと松田一戯さんが言ってくれました。だから僕は、畑のアーティストです」。そう照れくさそうに語るおおやアート村理事長の金谷智之氏は、地元のホールで音響オペレーターも担っている。

人のつながりを生み心を育むアートの拠点

も生まれました。食育授業を通じて知り合った子どもたちのお手本にもなりたいたいですね。上手に商売をされている先輩方は、いつも笑顔。大人が楽しそうに過ごしていれば、故郷を離れた子どもたちも帰ってくるのではないかと思います」

市民の心に彩りを与える存在として注目したいのは、NPO法人「おおやアート村」の拠点として二〇一二年にオープンした大屋地区の「BIG LABO」だ。二〇一〇年に廃校となった県立高校の建物を施設としてそのまま活

用。木彫りや木工、絵画、書道といった各種教室の開催やアーティストに向けた貸しアトリエの提供、体育館での企画展などを行っている。施設内には地元ゆかりの作家の作品が多数展示され、歩くだけで自然とアートにふれられる。

理事長の金谷智之氏によれば、地元出身の木彫作家・松田一戯^{かずき}氏を慕って平成の頃から多くのアーティストが移り住み、自主的な作品展が開かれていたとか。その流れから、アートでまちに賑わいをとの目的で養父市が「おおやアート村構想」を掲げ、兵庫県に掛け合せて建物が譲渡されたという。

「明延鉦山があつた大屋は、関係者の出入りが昔から頻繁だったせいか、外から来たアーティストに対して『よう来んさつた』と受け入れる土壌がありました。ラボの誕生以降も、その存在に惹かれて国内外から作家さんが移住してくる流れが続いています。住民にも少しずつ施設が存在が認知され、ふらっと立ち寄っていたいたり、近所の方が趣味を活かして『大屋手づくり市』に参加してく



上／体育館を利用する展示では、来場者の作品が会場をつくり上げる企画もある。下／子どもたちが遊びを介してアートにふれる、ワークショップの準備中。画家の田中今子氏（右）は緑あつて養父市に移住し、おおやアート村の初代理事長を務めた。アーティスト羽瀬祐輔氏（左）は、Uターン。ともに施設のアトリエを利用している。

れたり、若い世代やアートとは関係のない仕事をする方が活動を手伝ってくれたり、年々人が集まるようになってきました」

そう語る金谷氏の本業は、有機栽培を手がける農家。ラボのオープン直前、準備のために夜遅くまでついていた明かりに引き寄せられたのが縁で、経理など事務作業を手伝う形で関わるようになったという。

ラボではワークショップをはじめ子どものためのプログラムが充実しているのに加え、夜間も利用できる多目的の研修室や、雑貨から野菜まで販売する「日曜購買部」など、大人向けのメニューも多い。



養蚕農家だった築約一八〇年の古民家を、ギャラリーとして活用した「分散ギャラリー・養蚕農家」。養父市を拠点とするアーティストは多く、展示施設以外のまちなかでも各所で多数のアートにふれられる。

「アフターファイブの娯楽がない田舎ですが、例えば一日中、畑で黙々と働いた後、ここに来れば別の刺激を受ける。そんな時間を、僕自身が楽しんでいます。今後は



天滝溪谷の遊歩道を溪流沿いに登れば、「日本の滝百選」にも選ばれた落差98メートルの「天滝」の絶景が見られる。養父市内には、ほかにも豊かな自然にひたれるトレッキングコースが複数設けられている。

食に関するイベントなど、アートとは異なるジャンルも取り上げながら、多様な出会いが生まれる場所を地域に提供し、住民があらたな発見や癒やしを得られる環境をつくっていきたいですね」



上／マンガもまた、日本が世界に誇るアートの一つ。人気コミックを並べたとともに憩える空間は、かつての校長室だ。左／玄関のロッカーをはじめ、施設内の各所で多種多様なアートが見られる。

日本の中山間地域の 営みを守り継ぐために

市民の豊かな暮らしのため、行政の改革は、この先も重ねられる。市長の広瀬氏は、中山間地域であるがゆえの課題を全国に通ずるものとしてとらえていると話す。

「日本の国土の約六割強、耕地面積の約四割が中山間地域にあります。国民の約一割が暮らし、食料生産、洪水や土砂災害の防止といった多くの重要な機能を持っています。中山間地域に位置する養父市の挑戦は、同じ環境のほかの地域の課題解決にもつながると思っています」

二〇二一年度には将来のウェルビーイングなまちづくりに向け「やぶ2050（居空間構想）」が定められた。

「今の社会は複雑多様かつ、不確実で曖昧。正解を出すのが難しい状況下で、人々が孤立せず、生きづらさを感じない社会を目指しています」

農業、子育て、福祉の充実といったこれまでの取り組みは、より充実が図られる。加えて、普及率が

(写真提供：養父市立あけのべ自然学校)



日本屈指の錫の産出を誇った明延鉱山跡は、日本遺産「播磨貫く、銀の馬車道 鉱石の道～資源大国日本の記憶をたどる73kmの轍～」の構成遺産の一つ。坑道内は見学（要予約）ができ、4～11月は稼働時さながらに走る「一元電車」に乗る機会もある。

九割を超えるマイナナンバーカードと連携したデジタル技術の活用、下水から感染症の状況を解析する下水サーベイランスのような先駆的な試みも進められている。

「市役所では、二〇一八年から行政マネジメントの観点で人材育成を強化しています。課題に対してマネジメント的な発想が自然とできるようになり、この考えからです」

のどかな景色に和む養父市を巡り、何度か耳にしたのは、「働き者で、ときに頑固なほど真面目」という地

域特有の気質だ。豪雪地帯という環境が影響しているのかもしれないが、多くの人が厳しい環境に屈せず、自身で突破口を見つけて未来を切り拓こうとする姿が印象深かった。

官民それぞれの挑戦はまだまだ続くことだろう。その先に実る、先例のない成果に期待したい。



鉢伏山中腹、標高約700メートルに約180枚の棚田が広がる「別宮の棚田」。「日本の棚田百選」に数えられる眺めを、兵庫県では最高峰の水ノ山が彩る。